

氏名	イ 李	ジョン 姫	ウン 恩	
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第294号			
学位授与年月日	平成22年3月25日			
学位論文等題目	〈作品〉文様シリーズ 〈論文〉事物の私物化			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	三田村 有 純
（論文第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）	佐藤 道 信
（作品第1副査）	〃	名誉教授		増村 紀一郎
（副査）	〃	教授	（美術学部）	木津 文 哉
（ 〃 ）	〃	准教授	（ 〃 ）	布施 英 利

（論文内容の要旨）

私は、「事物」を念頭において作品を制作している。ここで言う「事物」とは、人間がつくり出した人工物、およびその人工物を含む環境そのものを包括した概念である。瞬間的な判断で購入しすぐ使い切ってしまう「事物」もあれば、長い時間をかけて悩み、躊躇した末「私のもの」として手に入れる「事物」もある。

私が「選択した」事物は「私の趣向」を反映し、私自身に代わって私がどういう人間であるかを他人に説明してくれる。同時にそれは、私の人生の歴史にもなり得る。工場で大量生産された無味乾燥な事物を選択する行為でさえ、事物それ自体が持つ本来の機能とは異なる自分自身だけの意味を与えることができる。それをここでは「事物の私物化」と呼ぶ。

本論では、このような私物化された事物のイメージ、その事物について持っている「私」だけのイメージを作品のモチーフとして取り入れ、私自身の話をするのと同時に、私が属している社会の断面を読み取ろうと意図している。

作品の制作において借用されるイメージは、反復という方法を通して表現される。既存のイメージを複製するほか、同じイメージを重畳させ表現する方法は、とりわけポストモダニズム以降、多くの作家たちによって試みられている。こうしたなかで、比例や対比の法則、調和に基づいたモダニズム的芸術観による教育を受けてきた筆者が、いかにして反復という要素を取り入れるようになったかを探りつつ、他の作家たちの作品に表われた反復的表現の事例を通じて、現代美術における反復の意義を考察した。

作品制作において主に使用した媒体は漆である。漆は日本および韓国、中国で伝統的に使われてきた天然塗料で、独特な色感と表面質感を表現することが可能である。しかし他の工芸材料と同様、人工的に生産された材料と比較して見ても、作家が意図したとおりに扱うことが難しく、長い歴史だけに複雑な工程を持っていて、技術の習得に多くの時間を要す。絶えず様々なモノがつくられ、モノに溢れる現代において、このような非生産的、非現代的とも言える漆の技法を用い、作品を制作する理由は何処にあるのだろうか。

本論では、借用と反復というコンセプトを入れる「うつわ」として漆という媒体を選択し、形象化することにより個性を表す一方、現代の工芸が直面している現実と未来に関して、作り手の立場から思考することを試みた。

第1章では、事物に関する断想／伝統を意識した表現・表現要素としての事物に関して述べた。日本

に留学する以前に韓国で制作した作品を通して、伝統工芸を意識した作品やその制作過程で感じた限界、美術における表現要素の範囲、表現可能な要素について再検討した。

第2章では、借用と反復による表現／新しい「目」・借用と反復の概念について述べた。事物、あるいは事物のイメージを借用し反復させた作品を制作するようになったきっかけを探った。また、借用と反復表現をもとに制作された作品及び作家について言及した。

第3章では、事物の私物化／作品について考察する。2005年から2009年にわたって制作した作品に見られる借用と反復表現を通じて、作家としての個性について述べた。

結びでは、工芸的表現に関する断想を述べる。現代の工芸が持っている意味について考察し、作品制作に用いられた漆の特性－装飾性、技法論などを中心に、新しい表現の可能性を探った。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、“伝統と現代”の分立傾向が強い韓国出身の筆者が、漆と螺鈿による伝統技法と、ポップアートをはじめとする現代美術の借用、反復の理論の援用による文様表現で、両者の結合をめざした試みについて論考したものである。

「何をどのように表現すべきか」。器形とオブジェ、用と造形をめぐる問題は、日本でも同じだが、実用性への注目と日常的モチーフの表現へと関心が移行しつつあった筆者に、来日当初の体験が意外な契機をもたらした。日本語や日本の生活にまだ慣れていなかった筆者の目に、あふれかえる物や商品が意味を失った「モノ」に見え、しばらくして帰国した韓国でも同じ体験をする。ここから、モノ(物)に意味(事)を付すのは自分であり、自分がモノを選びとることが、モノに意味を付すことになるのだと考えるにいたる。これが、本論文のタイトルにいう「事物の私物化」である。しかしここから実際の作品化には二つの問題があった。モチーフの設定(何を)と、表現のしかた(どのように)である。

モチーフについては、都会で生まれ育った自分にとってリアリティーがあるのは、自然モチーフより、身近な日常生活にみる都市的・人工的なものだと考え、それが「Cakeエビフライ定食」(2005)「Madeleine-Venusの誕生、誕生の秘話Ⅰ」(2004)「同Ⅱ」(2007)「Hamburger & Cola-World burger & Co. (Table)」(2006)「同(広告板)」(2007)といった、ポップアートのモチーフ設定へとつながっていく。「借用」の概念についての論考は、このモチーフ設定に関するものであり、筆者は八木一夫やフィリップ・ターフェをはじめ、20世紀の多くの現代美術作品や言説・理論に言及しながらそれを論じている。

一方、ジャン＝ピエール・レイノーやトニー・クラッグらに言及しながら論じた「反復」概念は、漆と螺鈿象嵌による筆者の文様表現、つまり表現のしかたの問題に関係している。反復による表現への志向したいは、「Madeleine-Venusの誕生、誕生の秘話Ⅰ」(2004)から「21個のBlack Box-記録Ⅰ,Ⅱ」(2007)「東京国際交流会館-A1415TIEC」(2008)を経て、修了作品の「個人的な趣向-文様シリーズ」(2008~2009)で明確なものとなっている。修了作品は、筆者がずっと捨てられずにいた子供時代のお気に入りのズボンの、幾何学文様に取材したものだという。漆と螺鈿象嵌による地模様と小さなモチーフの反復表現は、筆者がなかなか超えられなかった「文様をぎっしりつめて表現する」伝統技法の「タブー」を、現代美術の反復理論と「事物の私物化」によってのりこえた、筆者の現在の到達点を示している。

伝統と現代の間にみずからの表現をさぐる試みを、造形・理論の両面から論じた本論文には、中間審査の過程で査読者からの有益なアドバイスもあり、学位論文にふさわしい読み応えのある論文として評価された。

(作品審査結果の要旨)

漆芸は東アジアに植生する漆の樹液を利用し、とくに日本・韓国・中国それぞれの国で生活の道具として、また宗教や美術などの文化に関わって栄枯盛衰を繰り返してきた。

提出作品はテーマである事物の私物化―借用と反復で漆の絵画作品を制作、その制作を通して現代の工芸作品の在り方を問う試みで、絵画作品であるが視覚と触覚作用の研究でもある。

具体的には、エビフライ定食(乾漆制作工程習得を兼ねる)、マドレーヌーヴィーナス誕生の秘話Ⅰ・Ⅱ、スイカのイメージを借用したハンバーガー&コーラワールド&カンパニーのテーブルと広告板、21個のブラックボックス―記録Ⅰ・Ⅱ、東京国際交流会館―A1415TIEC、などを下敷きにして制作された今回の作品「個人的な趣向―文様シリーズ7-1～7は、視覚的に提示された作者自身の思想が現代人に提言され、観るものに強い印象を与え、特に蒔絵・螺鈿・変わり塗・金胎素地などの漆芸技法の応用、的確な素材の選択と使用方法による絵画作品に工芸的価値を付加する新たな表現形式の模索について、成功した作品といえる。

漆による現代美術作品として美を感じる、粘り強く丁寧な研究姿勢、作品制作の背景となる論文との整合性も高く評価できる。博士学位として相応しいと判断する作品である。

(総合審査結果の要旨)

本申請者の李姪恩氏は、韓国の淑明女子大学の学部課程、修士課程において韓国の伝統的な漆芸技法を修得してから、本学において6年間に渡り研究生、修士課程、博士課程と在籍し、日本のあらゆる漆芸技法を自己のものとし、作品創作と漆芸に関する研究に積極的に取り組み、発表を試み、多くの実績を上げてきた。

一貫してテーマとしたものは、「事物」という言葉で置き換えられるものである。人が作り出したもの総体を「事物」呼び、それを自己のものとして置き換え、イメージのもととしてきた。「事物」は他人が作り出してきたものであるから、それを具現化するときには本人は「事物の私物化」であると位置づけ、同じ造形を繰り返す時には、「借用と反復」という明確な言葉で論考してきた。

李姪恩氏はポストモダニズムの作家が表現として多用する重畳と反復という概念を読み解き、韓国で受けてきた比例や対比の法則、調和に基づいたモダニズム的芸術観による教育をベースに論理を組み立て、表現を探ってきた。

提出された作品は、韓国における幼少時から、日本において出会った事物をデザイン化し、平面的な破片として小さく同じ大きさの形を無数に切り抜き、漆を塗り重ねて表現をしたものである。

壁面の額縁も背景にも隙間無く私物化された事物が自己の表現として埋め尽くされ、その中に切り取られた事物が無数に配置されている。

韓国の伝統的な漆芸技法の螺鈿、日本の伝統的な漆芸技法である蒔絵と、中国の伝統的な漆芸技法である漆絵を融合し、壁面に掲げる作品として昇華したものである。

李姪恩氏は自ら提示した明確な論理思考で現代美術の一段面であるポップな反復の世界にあえて飛び込み、漆芸が持つ自然との関係をもとに具現化してきた作品は世界に通用するものである。

提出された論文と作品は質が高く、バランスが取れて、審査委員からの評価は高く、博士号の学位取得者として本学漆芸領域の模範になるものである。

今後は東アジアのみならず広く世界で活躍をする芸術家として稀有な人材であると信じ、発展を期待するものである。